NPO 純正律音楽研究会会報　～２００８年５月発行～

ひびきジャーナル

〒106-0031　東京都港区西麻布 2-9-2　Tel:03-3407-3726　Fax:03-3797-5640　e-mail:info@pure-music.ne.jp

No.22

発行日　平成 20 年 5 月 30 日
発行責任者　玉木宏樹
編集　NPO 法人　純正律音楽研究会
秋山治樹・相坂政夫

麗かな季節となりました。皆さん、お元気でお過ごしのことと思います。昨年の 8 月より実施しております都電演奏会も、この 5 月 31 日（土）で第 10 回を数えるまでになりました。9000 形レトロ車輌という狭い箱ながら、純正律で素敵に共鳴する空間を皆様に心ゆくまで楽しんで頂いております。更に今年の 8 月 2 日（土）と 8 月 22 日（金）の 19 時より、水上バスを 2 時間程借り切っての【ナイトクルージング演奏会】も企画しております。ご予約等、詳細は巻末にございます【今後のスケジュール】にてご確認下さい。

それでは【ひびきジャーナル No.22】をどうぞお楽しみ下さい。

♪玉木宏樹の、この人と響き合う♪

【前編】

アンティーク楽譜コレクター・音楽オーガナイザー

幅　至さん

☆ 幅　至（Itaru Haba）さん Profile

1959 年東京生まれ。1983 年～84 年、1989 年～95 年、二度に亘りフランス留学。パリ・ソルヴォンヌ第Ⅲ大学及び大学院にて言語学、英語学を学ぶ。

貴重なアンティーク楽譜コレクターにして音楽オーガナイザー。収集した楽譜をもとに、音楽会の企画、CD の制作等を手がける。古典派からロマン派、後期ロマン派、近現代曲まで、日本では知られていない数々の曲を主に初版譜を中心に所蔵し、その紹介に心血を注いでいる。また楽譜のみならず、その周辺資料、研究書も数多く所蔵。パリを中心にオークショナーの知人も多く、アンティークの世界そのものにも造詣が深い。

最近では『ワインガルトナー・ヴァイオリン・ソナタ』（MITTENBALD）の制作に参画。自身の楽譜コレクションを用いて HAKUJU HALL における 2005 年 2 月『村上弦一郎ピアノ・リサイタル』、2005 年 3 月『藤原亜美ピアノ・リサイタル』2006 年 3 月『紫垣英二ピアノ・リサイタル』津田ホールにて『ペテロ・オドレキウスキー、アコーデオン・リサイテル』をプロデュースする。

幅　先日の玉木さんの都電演奏会、良かったですね！僕のパートナーも一緒に伺ったのですが。やっぱり、そのあとの食事会の時に玉木さんが仰ってましたけど、結局『音楽の原点』みたいなところがありますよね。【弾く歓び】とか【聴く歓び】とか・・・で、それが単に人の曲の演奏ではなく、玉木さん自身の曲だという、それは更に重要性があると僕は思うんですけど。やはりどうしても、日本の場合だと別個に音楽家がいますよね。演奏家とか・・・でも本来は上手いか下手かというレベルの問題ではなくて、広い意味で音楽家の筈ですよね。原点でそうやって楽しんで、また人を楽しませないといけないという接点を、何か物凄く見失っている気がしてならないんですよ。

玉木　見失っているという言い方は、本来何かが分っていて見失うことでしょ？最初から何も分ってないんだから、見失ってなんかいないんですよ！（笑）そもそも根本が間違っているんですよ。

幅　ああいう演奏会、どしどしやって頂きたいですね。若手にもね、やっぱり裸で音楽にぶつかって欲しいと、こういう演奏会を経験する度に感じるんですよ。

玉木　僕はある音楽大学に講座を持っていますが、他の先生は学生に絶対僕と違うことばかり言うわけですよ。だから僕は学生に『君らが教えられてきたことは、全部間違いだ！』って言うとね、みんな拍手喝采なんですよ。『だけど、他の先生には言えないもんなぁ』だって。

幅　だから仮にですね、学校出たという卒業証明書は、あまり意味ないですけど、その為にある期間我慢したとしますよね。でも一方で玉木さんに出逢って違った音楽というものが存在することを知って拍手喝采したのなら、心に秘めてね、大学出て街に出たら、大学と関係ない筈だから、自分の気持ちの趣くままに、どんどんやればいいわけですよね！

幅　なるほど・・。それとはちょっと違うんですが、よく似たケースに僕なりに遭遇するんです。それはどういうことかと言いますと、みんなが知らないような曲、昔の曲で聴かれなくなっているものの中には、いっぱいいい曲があるんですよ。それを若い演奏家達に、自分のレパートリーにして、どしどし演奏して下さいって頼むわけですよ。そうすると『こんな曲を弾いていると、自分の演奏家人生、演奏家生命にかかわる！』というような発言が返ってくる。

玉木　そうですよ！そんなのばっかりですよ。

幅　僕はどちらかと言うと、音楽会を作り楽しむ側ですから、やはり【楽しむ】っていう言葉は非常に単純過ぎますが、【楽しむ】は沢山あった方がいいじゃないですか！単純に様々な作曲家がいて、演奏家がいて、当然沢山の曲を【楽しむ】っていう欲求がある筈なんですけどね・・・

玉木　いやぁ、まるでないですよ。僕はね、ピアニストで一人、金沢にいる金沢(中村)オサムさん、彼とは何回かお付き合いしましたが、彼ぐらいですよ。『僕は皆さんが知らないシラスという作曲家を知らすんだ！』って言ってね。（笑）

幅　（笑）
玉木　でも彼の CD,売れてないと思いますよ。
幅　だから、何か不思議なことをやっている人って言われるわけですよね。でも不思議ではなくて、一番普通なことをしているんだと思います。彼が気に入った曲を、自信を持って表に出しているわけですから、だからバッハなり、ショパンなり、シューマンを演奏しつづけるっていうのは、一方ではそれはいいことなのかもしれないけれども、食べさせられる側としては、毎日ステーキとか同じものを食えないわけですから。
玉木　まあ日本のレパートリーそのものは、非常に硬直化していますからね。
幅　本当に硬直化していますね。名曲 CD 入門とか言われる本も硬直化していますね。
玉木 【クラシック名曲入門】とかね、最悪ですね！
幅　不思議なことに、100 曲を、どの先生が書いても、殆んど同じだっていう・・・あれが全く違う 100 曲が例えば 10 冊づつ本に出ているんだったら、それは面白いと思うんですよ。ところが、ほぼ大体一緒ですよね！ところで玉木さんも忘れられた楽曲を捜されていますが。曲が忘れられてしまう原因はどんなところにあると思われますか。
玉木　この曲はいい曲だなぁ。緻密に書いてあるなぁ、繊細だなぁって思っても、ベートーベンみたいに『このヤロー！』みたいなところがないのね。緻密過ぎたり、繊細過ぎたりだと、我々に受けるぐらいなんですよね。だから、あまり繊細過ぎたりすると良くないのかもしれない。
幅　そういう話っていうのは、やっぱりオープンな部分で、しっかり討論してみるというか、本当に洗い出す必要がありますよね。そういう場をどんどん作って行きたいですね。そこから更なる運動を進めないと、中々難しいですよね。一人ひとりがちょっと言っているだけで、頭のおかしい奴が一人いるんだ！みたいな話になっちゃう・・・
玉木　僕のことは、プロの中では皆、知っていますよ。だけど、絶対に居ないことにしているんです。（笑）集まりの中に僕が顔を出すと『おぉー！』とか言いながら皆、何処かへ言っちゃうんだよね。（笑）
幅　やっぱり音楽そのものを変えて行くのは大変ですけれど、誰かがやらなきゃいけない。いろいろなアプローチをしながら、いろいろな演奏家、作曲家を巻き込むとかね。21世紀ですからね。
玉木　作曲家を巻き込むっていうのが、一番困難ですね。
幅　困難ですか？
玉木　ええ。作曲家っていうのはね、いつ、何処でね、思われだしたのか、作曲家自身のことを偉いと思い込んでいるんですよ。
幅　でも、今の日本の状況を見ると、作曲家より演奏家の方が偉くないですか？
玉木　いやいや、そんなことはない。武満 徹みたいに、ある曲は物凄くいい曲を書くのに、無調になると自分で書いた自分の間違いを分からないんですよ。それを【世界

の武満】と言うから、演奏家がそこに集まっちゃうんですよね。
幅　それも一種の権威主義ですよね。
玉木　権威主義ですよ。
幅　武満さんの曲が、個々にいいか悪いかということよりも、武満さんの曲を弾けば安全牌なんですよね。人から褒められるわけじゃないですか。
玉木　それと、武満さんも『よくやったね！』って言ってくれるから。
幅　だから、そういう意味ですよ。言葉は悪いけど聴衆の為にやっているわけじゃなくて、自分達の閉じた世界の中で行われるわけですよね。でも、それは一種しょうがない部分が仮にあったとしても、聴衆がない中で音楽があり、書かれた文章があるということは、不思議なことですよね。やはり聴衆のことも常に考えるっていう・・・教育そのものというか。そうなって行かない限り、本当に死につつあると思います。
玉木　ピアニストの清水和音、彼は全然さらわないのね。
幅　はい、そう言われてますね。
玉木　それで、何でも初見で弾けるのね。ほとんど僕と一緒なんですよ。だから同じ考えかというと、全然違うんですよ。僕は自分がやる音楽は、八百屋のおっさんにも、魚屋のおっさんにも、風俗の女性にも、『おまえら、クラシック、ダメだと思っているんだろ。だけどね、俺のヴァイオリンを聴いたら、そんなこと言わせない！』というつもりで、いつも弾いているんですよ。でも清水和音は違うんですよ。自分の音楽は、八百屋や魚屋には聴いて欲しくないと、相手にはしていないと言うんですよ。
幅　誰を相手にしているんですかね。
玉木　だから狭いサークルでしょう。自分のことを本当に分ってくれるサークルの中でしか演奏しないのだと。がっかりしましたよ。
幅　彼が云々というよりも、意外にその手の考え方の人が多いように、ひしひしと感じますね。
玉木　そうなんですよ。
幅　結局、自分達のやっていることは高尚なことで、凄いことをやっているということを言っているに過ぎない。そこにある音楽の歓びとか、本当にその曲を気に入って、自分が音楽しているとかは、全く別の世界ですよね。
玉木　そうそう、全く違います。
幅　だからやっぱり、それだけとったとしても、演奏には説得力がなくなるし、僕は演奏家ではないですけれども、自分なりに、ある演奏が楽しいか、つまり面白いか面白くないか、そういう思い入れをもって一生懸命に全身で弾いているかが大事だと思います。それともう一つ最近、リズム感の悪い演奏が多過ぎて、非常にノッペリしている。ノリが悪いというか。でも演奏家本人は一切、それに気付いていない。そこのところ、やはり大きな問題だと思っているのです。
玉木　大き過ぎる問題ですよね。私が【レッスンの友社】から出している【革命的音階練

習】ですが、この中に厳しいリズムのパターンばかりを出しているんですよ。これ、どこでやっても、皆、出来ませんね。でも、それが出来なかったらダメなんですよ。つまり、リズムが良くなったら、音程も良くなるのです。
幅　はい、分ります。
玉木　これはね、皆、徹底的にやってもらいたいんですよ。
幅　やはり、ハギレが悪いですね、皆。 その上に、どんなメロディが乗ろうが、形は一見、音楽が流れているかの如く聴こえますが・・・
玉木　リズム感に皆、責任がないんですよ。だから16音符を3つごとにアクセントつけるんですね。これは、自分が必ず責任をもって一拍をやってないと出来ないんですよ。
幅　わざと崩したんなら、いざ知らず・・・ですよね。
玉木　皆、譜面に書いてって言うんですよね。譜面に書けば出来ると思っているのか！ってことですよ。
幅　譜面をよく見れば、リズムそのものは内在して入っているんですよね。
玉木　クラシックの演奏家ってね、音程も分ってないし・・・ね。中西とか葉加瀬太郎とかヴァイオリンで作曲して、ジャズやロックみたいなのをやる奴いるじゃない！あれ、全部、僕の影響なんですよ、根元は。彼らは僕のことは知りませんが、その間に居る奴らが、実は玉木さんから教わったんだよということでやってますから。まあまあかなと・・（笑）
幅　玉木さんの場合、やはり体を張ってやっているわけですよね！
玉木　そうそう。
幅　それでしっかりと自立して活動しているわけですよね。でも、日本の演奏家って、小さい頃からたまたまある器楽をやってきたから、イコール、私は演奏家っていうような、言葉は悪いですけど、そういう考え方は幼稚ですからやめて、何の為に自分は演奏するのか、本当に自分は、どんな曲が好きなのかとか、やっぱりそれを、突き詰めてくれない限りね・・・
玉木　それは無理ですね。
幅　無理ですか？
玉木　無理です。それはもう絶望的です。
幅　（笑）絶望的ですか？
玉木　僕の同級生で、出席簿が隣でね。同じタ行だったから、よくいろんな話をしたんだけれど、本当にね、知識も何もない、教養もない。それが話していて急に、『私達芸術家は・・』って言うからね。
幅　（笑）それは、誰でも芸術家になりたいですからね・・
玉木　今のバラエティで『我々アーティストは・・・』って言っているのと一緒じゃないですか。（笑）
幅　しかし一方で、クラシックだけに限っても、日本にはこれだけ音大があって、演奏

会場もこれ程あって、素晴らしい楽器も、それこそ世界中のいい楽器が全部あるんじゃないかと思うくらい、この日本にありますよね。音楽家、演奏家人口もこれだけいるわけですから、潜在的な部分というか・・・
玉木　それは、日本の場合、音楽に限らず、みんなそうですよ。型から入るだけでね。
幅　　最初はしょうがない部分がありますけれどね、どうしても。でも、型から入って100年経ち、これだけいろいろやって来たわけですから、それにしがみつくのではなく、新たにいろいろ自分で開拓して行くことが必要になってきている。玉木さんのオフィスに来ると、常に目につくのがCDの新譜、日本では珍しいと言われているものが、たくさんありますよね。海外に目を向ければ、今やインターネットだろうが、普通の日本のCD屋さんで並んでいる曲を見ただけでも、実は日本で固定的に演奏されている以外のものが、常に入っているわけです。自分が海外に勉強に行ったりとか、または行かずとも、情報を得ることは今や容易な時代なわけですよ。そこを見れば、外で何が起きているかが、本当に分ると思うのです。
玉木　幅さんは、まだ何とかなるんじゃないかという幻想を、お持ちになってますね！
幅　　いや、僕の場合、何とかなるというよりも、何とかしたいという部分でしょうね。まぁ何とかなるかもしれないという幻想かもしれませんが・・・
玉木　幻想でしょうね。それを何とかする為には、僕も一生懸命やっているように、【クラシック埋蔵金】のような本を出すとかね、知らない曲のコンサートをやるとか、純正律音楽って皆知らないから、その良さを知ってもらう為に、自分で作曲して、CDを作って、演奏しているわけです。そういう地道な活動以外にないんですよ！
幅　　大きな活動というのは、無理ですね。
玉木　無理ですよ！
幅　　僕も非力ながら、自分のコレクションの一部を使いながら、年に数回、身銭をきって音楽会を開くんですけれどね。やはり、地道なことをやり続けると変わるかもしれないと思っているのですよ。
玉木　だから、【クラシック埋蔵金】みたいな新しい本になって、それが売れればいいんですよ。そうすると、これを書いた奴は、いい加減な奴じゃなくて、ちゃんとヴァイオリン弾いて、作曲している奴だって分れば、説得できて行くと思うんですよ。結構、クラシック関係で売れている本がありますよね。僕は読んでいて腹が立つのは結局、評論家なんですよ。『おまえ、作曲できないのに偉そうなこと言うな！』みたいなね。作曲できないからダメだっていうわけじゃなくて、何処から仕入れてきたか分らないようなことで、一刀両断しちゃうからね。
幅　　本来は、ある作曲家について、ここが素晴らしいというのを、一点づつ重ねることは出来るとしても、一刀両断の下に、この作曲家は、こうなんだ！だからダメなんだ！ということすら、恐ろしくて言えないものですよね。
玉木　もちろん、言えないですよ。だけど僕は、権威にぶつかって行って、跳ね飛ばさ

れてもしょうがないというドン・キホーテみたいなところがあるからね。僕は敢えて、バッハ、ベートーベン、ブラームスの悪口は、めちゃくちゃ言いますよ！みんなは、それを言わないんだよ。
幅　玉木さんの場合、作られた権威に対して、アンチテーゼというか、ぶつかりますよね。 ところで先程話題に出た、日本で忘れ去られた作曲家についてですが、その作品を全部通して見た時に、先程玉木さんが言われた綺麗だけれど、繊細だけれど、それだけという、インパクトが無いというか・・・・
玉木　まぁメリハリの問題でしょう、簡単に言うとね。
幅　それは、一つの曲については言えるかもしれないけれど、作曲家自身については絶対に言えないわけですよ、何故なら全ては見えないから。ところが、ベートーベンなり何なり、一応名前が出てしまった作曲家は隅々まで今、資料があるわけです。ところがその資料に関して、一言言わせて頂くと、判断する人達が全部見ていないのです。つまり、その作家のCDが仮に全部あったとしても、隅々まで聴いていないし、全部のエディションを見ていないのです。だから、それを聴かずして、それを見ずして、これがいい、悪いなんて、簡単には言えないわけですよ。
玉木　言えないですよ。もちろん全部聴く時間もないしね。僕はね、いろいろなCDを聴きますが、曲にしても演奏にしても、いいかどうかの判断は、一にも二にも【モチベーション】なんですよ。
幅　一つは作曲家として、どう冷静に見えるか、そして二つ目は、それと並行して、こちら側に音楽好きの誰かが居て、他の可能性があるかもしれないと・・・
玉木　それともう一つ、僕が発言する時に、強い立場があるのです。僕は自分が作曲するから、どんなグチャグチャした曲でも、上手いのか下手なのか全部分ります。それと、モチベーションがあるかどうかが一番気になります。その上で、これをやったら面白いか、やったらダメなのかということです、演奏上。非常に重要な判断だと思いますよ。
幅　重要な判断ですよね。だからこそ、音楽には説得力がある、素晴らしい芸術性があるということなのですね。

天国的純正律音楽入門　第22回　連載

【ミーントーンハープについて】

純正律音楽研究会代表
作曲家・ヴァイオリン奏者　玉木宏樹

私は最近、月に一回、都電荒川線の１両を借り切って、走る車内コンサートをやっていますが、ピアノなんてもちろん入らないし、純正律的な取り組みのことも考えて、アイリッシュハープをミーントーン(中全音律)に調律して演奏しています。そこで今回は、このミーントーン・ハープを工夫してくれた、高田ハープサロン、高田明洋さんに、その工夫と秘密を書いて頂きました。以下に紹介します。

＜ミーントーンハープについて＞

高田ハープサロン代表
高田明洋

2004年12月のクリスマスも近いころにケルティックハープをミーントーンに調律することができ、玉木さんに聞いていただくことができました。するとその場で「モーツァルトでＣＤを作りましょう」と言われ、とても驚きました。それから編曲、録音と進んで半年もかからない内にヴァイオリンとミーントーンハープによる「春へのあこがれ」が完成し、それ以降たびたび演奏会でも使っていただいています。

ハープはディアトニックの楽器です。ピアノでいえば白鍵しかありません。日本で一般的にアイリッシュハープと呼ばれるケルティックハープはレバーを手で操作することによって弦の長さを短くして半音高くすることができます。ですからもしハ長調に調弦すると♯しか作ることができずに♭が出てくる曲は

演奏できません。そのため♭３つの変ホ長調に調弦することによって、下の図のような音だけができます。そしてこの楽器では♭３つから♯４つまでの７つの調の演奏が可能となります。１オクターブは７音ですから倍の 14 の音を作ることができ、Ｄ♯とＥ♭、Ｇ♯とＡ♭という異名同音が作れます。

開放弦の音	Ｅ♭	Ｆ	Ｇ	Ａ♭	Ｂ♭	Ｃ	Ｄ
レバーでできる音	Ｅ	Ｆ♯	Ｇ♯	Ａ	Ｈ	Ｃ♯	Ｄ♯

さて、ミーントーンとは長三度が３：４の整数比による純正な和音を作ることができる音律ですが、この音律が現在まで続かなかった理由は、一つの調律ではすべての調をカバーできないことにあります。つまり曲の調によって調律をやり直さないとならず、すべての調を演奏するには６通りの調律が要求されます。この点が平均律には絶対かなわないところです。しかしケルティックハープは上記の７つの調しか演奏できない楽器ですが、この７つの調は１通りのミーントーン調律ですべての長三度が純正となります。これがケルティックハープをミーントーンにした理由です。　余談ですがグランドハープはダブルアクションといって一つの弦で♭、ナチュラル、♯の３つの音ができますので、１オクターブ７音×３の２１音が作れます。これをすべて異名異音で調律できれば鍵盤楽器と違って１通りの調律ですべての調がミーントーンとなります。グランドハープをミーントーンにするのはいつか実現したい私の夢です。

ミーントーンは全音を純正律のように大全音（204 セント）と小全音（182 セント）に分けずに、その中間の 193 セントにして 386 セントの長３度を作ります。このためにミーントーンは中全音律と訳されます。一方で半音は全音階的半音（大半音=117 セント）と半音階的半音（小半音=76 セント）に分かれます。ディアトニックに含まれる半音（ミとファ、シとド）は大半音に、その他のレバーでできるすべての半音は小半音に調律します。ですからケルティックハープでできるＤ♯とＥ♭、Ｇ♯とＡ♭は異名異音となり、その差はＣ♯とＤ♭などでは 48 セントも違ってきます。

ミーントーンハープの作り方は、レバーでできる半音をすべて小半音の 76 セントにして、あとは開放弦を下図のとおりにミーントーンに調弦するだけです（Ａを 0 セントにするためにこのような数値になっています）。

開放弦	Ｅ♭	Ｆ	Ｇ	Ａ♭	Ｂ♭	Ｃ	Ｄ
セント	+20.5	+13.7	+6.8	+24	+17.1	+10.3	+3.4

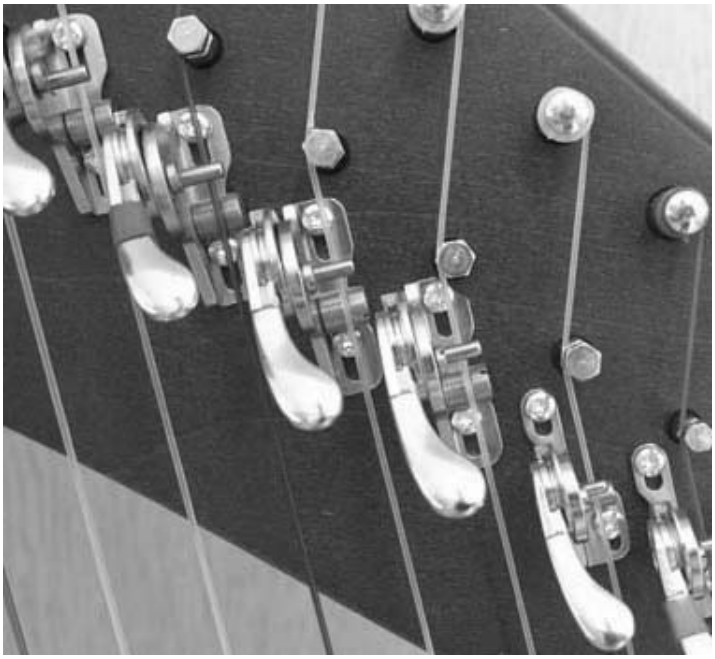
レバーは手で操作することによってギターのフレットのように弦長を短くしています。ですからレバーでできる半音を 76 セントにするにはレバーの位置を上にずらして半音を狭くすればいいだけです。理屈は簡単ですが 76 セントとは平

均律の約四分の三しかなく、そこまでレバーの位置を変えるには次ページ写真のような改造が必要でした。写真上が平均律のレバーですが、写真下のように削らなくてはならない部品がでてきます。

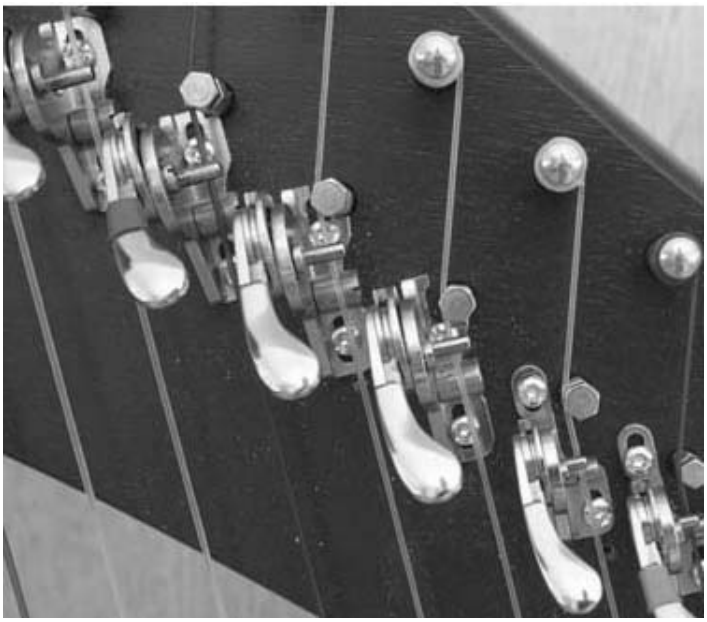
画像(lever1)　　画像（lever2）
平均率　　ミーントーン

76 セントの半音を作るにはチューナーに頼ります。私が使っているチューナーはアメリカのピーターソンというメーカーのアナログ・ストロボチューナーです。これは 0.1 セント単位で計測でき、さらに２種類の自分で作ったプログラムをプリセットできます。これでＤ♯とＥ♭のような異名異音が別々にセットできる優れたチューナーです。もう一つの優れものはカマックハープです。これはフランスのメーカーですが、従来はフレットの位置がレバーとは別にピンで木部にささっていて、レバーの位置を変えても半音をかえることができなかったのです。しかしカマックはレバーとフレットが一体となっているので、容易に半音が変えられ、さらに微調整できるピンも備えています。ケルティックハープをミーントーンにするアイデアはかなり昔からあったのですが、この楽器でやっと実現できました。

ところで中世には金属弦のハープ（別名クラルサッハ）がありました。この楽器にはレバーがついていなくて半音を変えることができません。アイルランドでこの楽器を作っている人がいて、日本人ハーピストでこの楽器を持っている方がいます。そのコンサートを聞いたことがありますが、金属弦は音の減衰が非常に長く、手で止めないかぎり 10 秒以上も音が持続します。その奏者は何の疑いもなく平均律で調弦して演奏していましたが、減衰が長いほど和音のうなりがはっきり聞こえ、とても聞くに耐えない和音になり、思わず和音のうなりを数えてしまったほどです。演奏会後にその演奏者に、何で半音ができない楽器を平均律で調律するのか、もっときれいな和音が作れる調律方法があるのに、と言って説明を試みましたがまったく問題にされませんでした。ところが今年の４月にアイルランドからアームストロングさんというこの金属弦ハープを弾く人が来日しました。演奏会は聞けなかったのですがお会いする機会があり、調律は平均律ですかと尋ねました。すると「日本でそんな質問をする人に始めて会いました」と驚いて、ミーントーンで調律していると言いました。私の考えが間違っていなかったのがうれしかったと同時に、純正三度はケルト人が発見したという説があるそうですが、ひょっとしたらこの楽器が原因かも、とも思いました。



(Lever 1)



(Lever 2)

ムッシュ黒木の純正律講座　第22時限目

平均律普及の
思想的背景について（11）

純正律音楽研究会理事　黒木朋興

前回は、18 世紀末に発明・開発された「クロノメーター」という名の初期のメトロノームが、普及しなかったことに ついて述べた。このモデルはテンポの速度を示す目盛りが恣意的なものだったのである。

19 世紀に入ると、当然、改良された器機が開発されていく。例えば、ゴットフリート・ウェーバーの手による「タク トメッサー」が挙げられる。ウェーバー自身が 1813 年 7 月の『一般音楽新聞』に掲載した記事には、「同じテンポを測っても機器によって一定しないのでは ないか」との声に対して、この機種は「これまでのものと違って、振り子の長 さがテンポを一義的に決定するという原理にもとづいて、その長さをそのまま 表示」しているので「作曲家が速度記号と並べて楽譜の冒頭にこの振り子の長 さ」を記しておけば、たとえ演奏家が同じ機器を持っていなくても作曲が意図 した正しいテンポを得ることができるとある。

更に、同じ年の 1813 年の 12 月には、メルツェルの新しいクロノメーターの完成が報じられている。この機械には、 現在のメトロノームのように、一分間の伯数を 48 から 160 までの数字で表示してあるのだ。また、記事にはこの器機を用いて成果を挙げている作曲家として サリエリ、ベートーヴェン、ヴァイゲルの名が挙げられており、作曲家の後押 しも付け加わった点は注目に値するだろう。やがてメルツェルは 4 年後の 1917 年にメトロノームの名を冠した「今日一般に用いられているものとほぼ同一の 形状と構造をもつ」新機種を発表し、これを機会にこの機器は広く普及してい くこととなる。例えば、この『一般音楽新聞』の紙上に、「同年 9 月にははやくも作曲家ジャン・バティスト・クラマーがすでに広く流布していた自作の練習曲の第一巻と第二巻のあわせて 84 曲に関して、適切なテンポをメトロノーム記号で示したものが掲載され」るのだし、「12 月になると、今度はベートーヴェンが自作の 7 つの交響曲（〈第九〉はまだ未完）の各部分につけるべきメトロノーム 記号を一覧表にしたものが譜例入りで

掲載され」る。実際、メルツェルと直接の友人でもあり、「メトロノームの推薦者に名を連ね、自作に積極的にメトロノーム記号を書き込ん」だ大作曲家ベートーヴェンがこの機器の普及に果たした役割は絶大なるものがあった、と言って良いだろう。

この後メトロノームの紹介記事は『一般音楽新聞』の紙上から姿を消していくことになると言う。載ったとしても、そこでは「もはやメルツェルのメトロノームを用いてそのやり方で測定することは前提となって」いることから、渡辺氏はこの種の記事の減少を、メトロノームが普及し「完全に定着した」ことの証しであるとしている。

そしてこの減少に呼応するかのように、今度は激しい中傷記事が姿を現す。もちろんこの種の機器への過剰な信頼に対して不信感を示す記事は初期の頃から散見してはいたが、そのような論者達もこれが「万能の機器」としてではなく、あくまでも「物差し」として使われるのならば、「素晴らしい手段」になることを認めていた。しかし、この機器が既に広く普及していた 1819 年にパリからの報告として登場した記事は、これまでのものとは明らかに違う調子でメトロノームに対する激しい不快感を表明している。

> モーツァルトや、イタリアやドイツの大作曲家たちは皆、自作の速さが取り違えられるかもしれないなどとおそれることなく、自らの不滅の名作を世に送り出した。メトロノームを自らの作品の中核であるなどとこころえ、そのチクタクの中に生命を求めようなどとするのは三流作曲家なのであり、彼らはその生命を作品の中に移入することができないのである。

論者はここで「生命を作品の中に移入すること」ができればこのような機械に頼る必要はまったくないと説いているわけである。また、この記事においては「鍵盤の前に横にわたしてある二本の木枠の間に手を入れ、鍵盤の上に用意されている可動式の指入れに指を入れてピアノを練習すれば正しい手の形が身につくという」ピアノ練習のための補助器具も同時に槍玉に挙がっていることに気をつけたい。機械的な正しさに対する嫌悪感は、まさしく論者の考える芸術性と対極の位置にあるものだとは言えないだろうか。そしてこの嫌悪感は、現在の「『楽譜のあるがまま』をコンピューターに打ち込んだとしても、『音楽』にはなりえないのである」という見解に直接繋がっているものであると言えるだろう。

【Musica おおた】の音楽よもやまばなし
― 音楽を聴かせると酒がうまくなる？ ―

純正律音楽研究会正会員
音楽事務所 Musica おおた
廣川　深

以前、『動物も音楽を聴いている』というテーマで私の実体験を書いたことがありますが、最近酒や醤油づくりのもろみに音楽を聴かせているということを書いた本をしばしば見かけます。ワインに音楽を聴かせたら発酵が早まり、アルコール度数も少し高くなったという報告もあるようです。ある醤油工場では、もろみ蔵全体に音楽が流れています。音楽を聴かせるとよいもろみに育つというのです。動物には聴覚がありますが、酒や醤油はどうなのでしょう。と思っていたところに折しも先日、江本勝氏のＤＶＤを見る機会がありました。江本氏についてご存知のない方のために簡単にご紹介しておきます。江本氏はアメリカで共鳴磁場分析器やマイクロクラスター水（波動水）に出会い、波動理論を基礎として15年以上も水の研究をしている方です。今回、私が見たＤＶＤも、水によい音楽を聴かせると美しい結晶ができるという実験でした。音というのは振動ですから、水に対して何らかの働きかけをすることは充分考えられます。前述の酒、醤油、そして植物などにたいしてもしかりです。ということは、音の振動で水も振動する？まあ確かにそうなのですが、ちょっと待って下さい。私は音楽家で音響技術者ですから、一応の音響物理の知識は持っているつもりですが、液体に伝わる音響エネルギーはわずか 0.1%、残りの 99.9%は液面で反射されてしまいます。ですから音の振動だけで液体が攪拌されると考えるのは、少しばかりムリがあるのです。そこで登場するのが量子力学という文字面を見ただけでむずかしそ～な学問。分子、原子といった素粒子を研究する分野ですが、これによれば、生物も無生物も全ての物体は振動している、そして外部からの振動を受けることにより共振する、という理論が成り立ちます。だとすれば前述の酒や醤油についても解明する手がかりとなります。音波により水の分子が共振現象を起こすと考えられるからです。一方、音波が直接液体に働きかけるという視点で考えると、超音波をもってすれば可能です。超音波というの

は、とてつもないエネルギーを持っています。ここでいう超音波とは、数百キロヘルツという可聴周波数をはるかに超えた音波です。高級酒はともかく、超音波を使うと安酒は確かにまろやかになるようです。酒の熟成に限らず、超音波には化学反応を大幅に促進させる様々な作用があるのです。最近のＣＤにはスーパーオーディオＣＤなどと称して、100 キロヘルツくらいまで録音帯域を拡張したものも多く出回っています。したがって、酒に聴かせるには超音波成分を多く含んだ音楽がよろしい。というわけで、自分で実験できるかなと思い、ステレオの前に日本酒を置いてモーツァルトを聴いていますが、これって訳を知らない人が見ると変かもしれませんね。

とはいうものの、私にとっては家族と談笑しながら飲む酒が一番うまいと思います。さて、今夜も一杯やりますか。

【偶然のみちびき】　連載

純正律音楽研究会
正会員　川合　浩

最近、いろいろと物の整理をしている。その過程でスクラップブックも出てきた。新聞の切り抜きが貼ってある。ほぼすべて「音」に関する記事だ。最初に貼ってあるのは、「サラリーマン」シリーズ第 336 話「レコード針は死なず」。そう、ナガオカに関するものだ。これが 1991 年 5 月 29 日。なお、ナガオカトレーディングは、現在渋谷区千駄ヶ谷四丁目にあり、北参道からやや原宿寄り、山手線の車窓からもその看板が容易に確認できるはずだ。

さて、前回の記載内容に関するものとしては、人に高音を聞かせた場合の脳の反応についてであるが、これは読売新聞 1992 年 3 月 18 日の記事「CD 10 歳『より良い音』への新工夫」の内容だった。これには、二万ヘルツ以上の高音は耳に聞こえたと感じなくても脳は反応するということが分かってきたと記載されている。また、大橋力氏に関しては、同じく読売新聞 1992 年 6 月 17 日「音のいま＃2」で紹介されていた。スクラップ記事を見て、前者についてはほぼ私の記憶どおりで、大橋氏については別の記事であったことが判明した。ご興味のある方は、それぞれの記事を参考にして欲しい。

さて、前回のタクシー運転手に関するクイズであるが、どれが正解だと思われましたか？正解は「3. 中学３年時の同級生」。中学三年時の同級生に会いに行くために、それも徒歩圏なのに、この日はどうゆう訳かタクシーを拾い、その運転手が、なんとこちらも中学三年時の同級生であったのだ。彼は私の名は憶えていないと返答した。C さんについてはと聞いてみると、憶えているという。狭い路地の関係もあり、すし屋の前までは行けなかったが、名刺と携帯の番号をくれた。すし屋に着いて、もらった名刺を C さんに見せると一瞥のみ。だが、引っかかるものを感じたのだろう、すぐに名刺を食い入るように見始めた。「Y 君？」。ここで思い出したのだ。どうもこの二人、仲良しだったらし

い。携帯の番号を書き写し、連絡するという。
私自身も、なんか、キツネかタヌキにだまされているようで、彼からもらった名刺も、翌朝には木の葉に戻っているのではないかと、ほとに思ったほどだ。よくもまあ、このような偶然が発生したものだと、いまでも思っている。

前述の物の整理は、1 月から始めているのだが、1 月 31 日の作業では、ニューヨークタイムズ、コネチカット版の切り抜きが出てきた。前回も触れたマーク・レビンソン氏が新たに起こした Cello 社に関する記事なのだが、その新聞の日付が 1988 年 1 月 31 日。ジャスト 20 年前の記事だ。時の偶然も面白いものである。

また、2 月 12 日の作業では、こちらも前回触れた寺垣プレーヤーに関する記事で、愛好家向けレコードプレーヤー「Σ5000」発売の記事。その日付が 1994 年 2 月 15 日。同日ではなかったものの、ほぼ同日といってもよいであろう。なお、このプレーヤーの発売日は、記事前日の 2 月 14 日とのことだ。

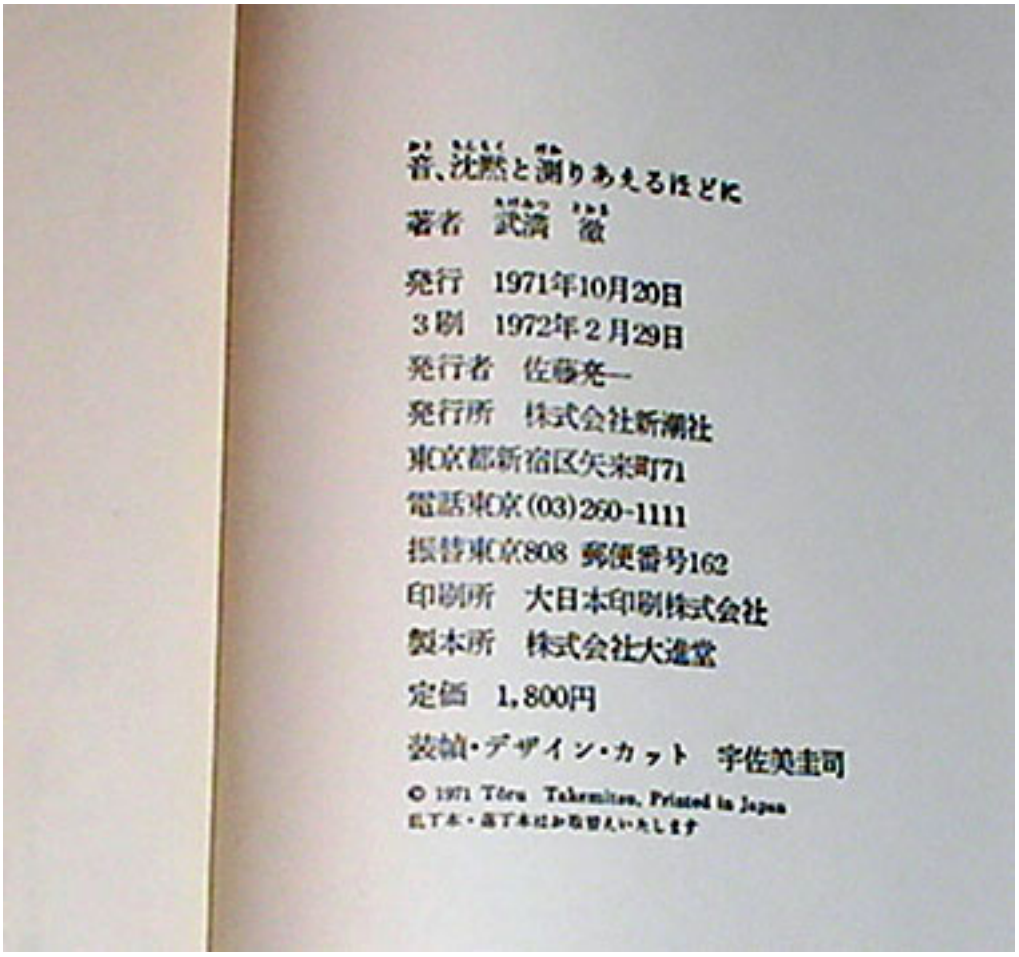
一昨年秋の純正律との出会いは、前回書いたように偶然の賜物と思っているが、その頃のほかの偶然についても、記載しておこう。

タクシーについては前述の通りだが、また車関係で。

一昨年の 10 月 14 日のことだ。明治神宮をスタート地点とするミッレミリア 2006 の出発式の時、加速ポイントが面白かろうと表参道ヒルズの前で、スタートしてゆく車たちにエールを送っていた。やや長かったが、最後の車を見送り、さて昼食へと歩き始めたら、背後から大きな声が聞こえてきた。注意して聞いてみると、私の名を呼んでいるようだ。まさかこんなところでと、後ろを振り返ると、なんと高校同級生の A 氏だった。前年の母の葬儀の際には受付を手伝ってくれた友人の一人だ。その際には、もう一人、友人が手伝ってくれていたのだが、こちらの彼とは前の週に 10 か月振りに会っていた。度重なる再会だ。A 氏に昼食でもと誘うと、奥様が銀座の Y ホールに行っているという。許可を得て私も同行することにした。Y ホールで奥様に久々にお目にかかったとき、偶然出会ったことを告げると、相当驚いていた。A 氏が表参道を歩くことなど、非常に珍しいとのことだった。本当に、ミッレミリアのスタートがあと 30 秒早く終わっていたら、おそらく、この出会いはなかったであろう。A 氏懇意の美容院の先生が、いつものようにウィークディに対応していたら、この出会いはなかったであろう。この偶然も、いま書いていても、あり得ないほどの偶然で、筆がしばしば止まってしまう。

さて、今度は、音楽書の話を書こう。私にとって初めての本格的な音楽書と言っていいのが武満徹さんの「音、沈黙と測りあえるほどに」だ。学生時代、渋谷の紀伊國屋書店で見つけ、そのタイトルの不思議さに惹かれて手にとったものだ。お読みになった方、またお持ちの方も少なくないのではと思う。私が手にとった本の奥付が変わっていた。どう変わっていたか。奥付ページの写真を添付するので、お持ちの方は、ご自分のと

是非比較してみてください。
変わっていた点については、次回に。



音、沈黙と測りあえるほどに
著者　武満　徹

発行　1971年10月20日
3刷　1972年2月29日
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町71
電話東京(03)260-1111
振替東京808　郵便番号162
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定価　1,800円
装幀・デザイン・カット　宇佐美圭司
© 1971 Tôru Takemitsu, Printed in Japan
乱丁本・落丁本はお取替えいたします

連続エッセイ　【外科医のうたた寝】　第 21 話

≪トレイルラン≫

純正律音楽研究会理事　　福田六花（医学博士、作曲家）

12 年前から趣味で始めたランニングにのめり込み過ぎて、ここ数年は山を走ることにも熱中している。野山を走ることをトレイルランと云い、最近はじわじわとブームにもなっている。

いわゆる登山とはだいぶ趣きが異なり、小さめのリュックに飲み物、食料、簡単な防寒具程度を詰め、登山靴よりもだいぶ軽い専用シューズを履き、あまり険しくない野山を駆け巡る。山の頂上をひたすら目指すのではなく、快適に走れる道をさがして、きつめの上りは速歩ですすみ、走れるところは走り続ける。岩や、倒木や、木の根を飛び越えながらすすむ下り坂は、ジェットコースターやスキーに似た快感である。出会い頭に鹿、猪、猿などの野生動物に遭遇することもあるし、丘を上り切ると雄大な景色に出会うこともある。こうして山の中で 2～4 時間を走って過ごすのが、僕の大好きな休日である。

こういった山を走るトレイルランの大会が、日本では年間 60 レースほど行われている。昨年から僕の住む富士河口湖町の東海自然歩道を使って、＜富士山麓トレイルラン＞と云う新しいレースを行っている。僕はプロデューサーとして、レースのコンセプトやコースの設定、役場、観光協会との交渉などにあたり、レースのあとの表彰式ではライブ演奏もした。集まった230名のランナー達は、歓声をあげながら13キロのトレイルを駆け抜け、愉しい秋の一日を過ごしてもらった。

今年も9月に第2回富士山麓トレイルランを開催します。初心者歓迎。童心に帰って、山を走りませんか。詳しくはランネット・トレイルもしくは月刊ランナーズ誌（ランナーズ社：毎月 22 日）をご参照下さい。

RUNNET TRAIL　　http://www.runnet.co.jp/project/trailrunning/index0.html
福田六花　official web site　　http://www7a.biglobe.ne.jp/~ricka/index.html

＜福田六花　ライブスケジュール＞

○4/26 土曜日　「くーぷ」　愛知県犬山市大字羽黒新田郷東 11-2　phone 0568-68-0214
　　12:30~　16:00~　愛知県のクレープショップの新装開店記念ライブ

○5/24 土曜日　＜KABUTO＞　東京都渋谷区道玄坂 1-22-12　phone 03-3463-6699

時間未定(たぶん　20:00 頃)　　渋谷のライブハウス

〇5/27 火曜日　　＜富士河口湖町役場＞　　山梨県富士河口湖町船津 1700　phone 0555-72-1111

12:00~　　町役場でのロビーコンサート

〇6/13 金曜日　　＜Bon appetit＞　東京都品川区中延 3-8-7 B1F phone 03-3787-3634

18:30 open 19:00 start　　食べて飲んで、ライブを愉しんで下さい。

〇7/12 土曜日　　＜潮風ふれあい館＞、、、愛媛県双海町

恒例の愛媛県でのライブです。（お問合わせ　未来企画　phone 0897-36-1157 fax 050-3488-0251）

CD レビュー純正茶寮

ヴァイオリニスト・マンゼについて

純正律音楽研究会代表
作曲家・ヴァイオリン奏者　玉木宏樹

最近とても印象深い本と、CDに遭遇しました。その本とは、石井宏「誰がヴァイオリンを殺したか」(新潮社)です。私は石井宏氏の強引なクラシック批判は全面的に賛成していない所もあるのですが、この本は、ヴァイオリンをテーマにしているので買いました。しかしこの本はかなり刺激的で、とても面白く読めました。最初はストラディヴァリ神話の打破です。私も約 15 年前に書いた「猛毒クラシック入門」の中で、ストラディヴァリ信仰を激しく批判しています。いわく、ストラディヴァリは、いわばメートル原器と同じで、値段をつけるバロメータとしての役割でしかないと。その点に関しては、殆ど違いがないのですが石井氏の方が、根拠が明白で、説得力があります。今、世界で一番の鑑定書を出すといわれているヒル商会について、以下のように書いています。

では、だれがその値付けをしたのか。そこでロンドンのヒル一族に戻る。クレモーナの銘器の修理屋、輸入屋としてスタートした彼らのビジネスが四代受け継がれるうちに、この商会の持つ商品知識と工芸的ノウハウは膨大なものにふくれ上がった。彼らはそこから出発してクレモーナの銘器、特に数あるストラディヴァーリのひとつひとつの楽器の履歴、細工の精度、保存の状態、特長などを徹底的に調べ上げ、それらの楽器の一覧表を作り、

それらにランキングを与えた。もしその膨大で精緻な作業を彼らの功の部分とするならば、その体系づけの作業の中で、音楽的な評価が関与する部分が能う限り少なく、もっぱら美術的、工芸的価値に偏しているのは負の部分である。それは彼らが音楽家ではなく、美術修理工であり販売業者であった以上、仕方のないことであったが、また別の言い方をすれば“音の良し悪し”などというコンセプトは極めて主観的なもので、規準の立てようもないものであるから、とてもそれを物差しに使うわけにはいかない。従ってヒルの作った即物的な価格体系はそれなりに妥当なものである。しかし、彼らの作った価値体系はのちの音楽家やしろうとの客筋などを大いに錯覚させることになった。すなわち、ストラディヴァーリは音楽的にすぐれた楽器であるから高いのだという誤った信仰がそこから生まれてきたからである。ストラディヴァーリはなぜ高いのか。それは二度と生産されることのない美術骨董品だから、というのがその答えであって「音が良いから」ではないのに、人々はそう思いこんだ。

つまり、音の良し悪しと楽器の良し悪しは違うということです。

そして読み進む内に、古楽のヴァイオリン奏者、マンゼの奏く、タルテーニの「悪魔のソナタ」を絶讃している文章に会い、びっくりしました。不覚にも私はマンゼを知らなかったのです。石井氏によれば、マンゼこそ今では失われたパガニーニの官能性を引きついでいる唯一の演奏家とのこと。私はあわてて、CD ショップに行き、買ってきました。

石井氏の本によるとマンゼは次のようなことを言っています。

またマンゼは、現在生きている作曲家の中には自作がどのように演奏されるのがいいのかわからない人がいるという。ましてや、「はるか昔に死んでしまった作曲家に答えてもらいたい疑問は山のようにある」のである。たとえば、17 世紀から 18 世紀にかけて有名だったヴァイオリン奏者ビーバーの譜面を見たときのことをマンゼはこう言っている。「今でもビーバーのソナタの譜面を始めて見たときのことは忘れられない。譜面はどのページも要点しか書いていない。いくつかの音は書かれているが、それをどうやって演奏するのか、なんの指示も書かれていない」

それでは、どうやってマンゼは演奏に漕ぎつけたのか。

「それに対する解答は自然発生的に姿を現し始めた。それは天空の彼方からでも降ってこない限り、私が作曲家を追い出してまでも、彼になりすまし、彼の代理を勤めるまでのことである。作曲者になり代わり作曲者になりすま

すことこそ、バロック音楽を演奏する上での重要な部分なのである。そうやって到達した私の演奏は多くのほかの演奏家とはちがったものに見えよう。いやほかならぬマンゼ自身がさまざまに化けている姿を比較してもらうともっとよくわかるであろう・・・。

この言葉は、私がどこでもいつも言っていることで、どんな曲でも、自分が作曲したと思えたら、どう奏くかはすぐに分かる、ということと同じなのです。但し、マンゼはバロックに限ってと言っていますが、私は死後 50 年たって著作権の消滅した曲はすべて同じだと思っています。

さて、私は買ってきたCDをワクワクしながら聴きました。「悪魔のトリル」を無伴奏でやる、というのは余程の自信がなければできません。たしかに音程も音もいいのですが、別に官能的だとは感じませんでした。本には書かれていない「スコルダトゥーラのためのパストラーレ」には驚きました。スコルダトゥーラを御存知ない方の為に説明しますと、移調調弦ということです。マンゼが引用したビーバーのVlnソナタには多くのスコルダトゥーラ曲が見られます。調弦はいろいろありますが、タルティーニのこの曲は、ソレラミではなく、ラミラミです。そして曲の調性は A-dur。まさに純正律的にとても美しいハモリが随所で聴かれ、非常に感激しました。

イベントレポート

1 JAN

☆ １月１２日（土）、六本木にある国際文化会館の矢山式気功能力開発セミナー会場にて、玉木がゲスト出演しました。セミナー会場の 100 名を越えるお客様全員が、心から感動されました。

☆ １月１６日（水）、河口湖老健施設【はまなす荘】（施設長：福田六花氏）にて演奏会を行いました。ドクター六花氏のギターと歌も加わって、大いに盛上がった演奏会となりました。

☆　２月２３日（土）　第７回　玉木宏樹の【都電演奏会の旅】開催。

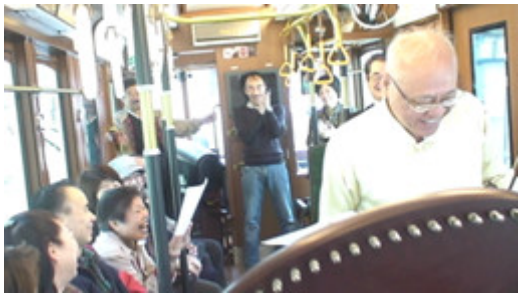
新組曲「都電荒川線」の一曲目、【早稲田】を初お披露目。とても印象深い。

そして、好評の楽曲【チャルダッシュ】では、午後の日差しが眩しい中、都電のカタンコトンという音にハープとヴァイオリンが重なって、絶妙のコラボレーションでした。

☆　３月１５日（土）　第８回　玉木宏樹の【都電演奏会の旅】開催。

玉木の新曲【早稲田】に始まり【鬼子母神の子守唄】の初お披露目。

陽気も暖かいし、車内も温かいし、アタタカイづくしの楽しい演奏会でした。三ノ輪橋での親睦会では、玉木の誕生会も行いました。



4 APR

☆ 4 月 19 日（土）　第 9 回　玉木宏樹の【都電演奏会の旅】開催。

洗足学園音楽大学の水野佐知香教授を迎え、都電演奏会では初めての 2 台ヴァイオリンでの演奏会でした。童謡あり 、アメリカ民謡あり、モーツァルトあり、皆、耳馴染みのある曲たちばかり。2 台ヴァイオリンの呼吸が絶妙に合って、それはもう鳥肌と感動の 1 時間の旅となりました。

今後のスケジュール

（１）5 月 31 日（土）第 10 回　玉木宏樹の【都電演奏会の旅】開催。
12：00ｐｍ早稲田停留所出発～13：00 三ノ輪橋着
出演：玉木宏樹、吉原佐知子（お箏）

（２）8 月 2 日（土）【純正律・アトマスキュア ナイトクルージング演奏会】
120 名様募集。18：30 両国桟橋集合、19：00 出帆～21：00 帰港（両国）
出演：玉木宏樹、峰咲マーユ、水野佐智香、高木真理子、三宅良子
福田六花

（３）8 月 22 日（金）【純正律・アトマスキュア　ナイトクルージング演奏会】
120 名様募集。18：30 両国桟橋集合、19：00 出帆～21：00 帰港（両国）
出演：玉木宏樹、峰咲マーユ、高木真理子、三宅良子、福田六花

都電演奏会・ナイトクルージング演奏会のご予約、お申込みは下記の通りです。

〒106-0031
東京都港区西麻布２-9-２　NPO 法人 純正律音楽研究会　（担当：相坂）
お電話：０３－３４０７－３７２６
FAX　：０３－３７９７－５６４０
e-mail: info@pure-music.ne.jp

皆様からの、ご予約、お申込みを心待ちにしております。

純正律・アトマスキュア

ナイトクルージングコンサート

隅田川から東京湾の夜景を眺めながら、夏の夜のひととき、
音の自然食「純正律音楽」に身と心を委ねてみませんか。
きっと素敵な夜になると思います。

日時：２００８年８月２日（土）＆８月２２日（金）
　両日共、午後６時半に両国発着場にご集合。（両国国技館正面入り口の向い）
乗船：午後７時、出港：午後７時１０分、帰港：午後９時
料金：7,000 円（１ドリンク＆１フード付き）
出演：８月　２日（土）玉木宏樹（ヴァイオリン）、峰咲マーユ（お話）
　　水野佐知香（ヴァイオリン）、福田六花（歌・ギター）
　　高木真理子（ハープ）、三宅美子（ハープ）
　　８月２２日（金）玉木宏樹（ヴァイオリン）、峰咲マーユ（お話）
　　荒井章乃（ヴァイオリン）、紫倉麻里子（歌）
　　高木真理子（ハープ）、三宅美子（ハープ）

お申し込み・お問合せ：〒106-0031 東京都港区西麻布 2-9-2
NPO 法人 純正律音楽研究会　担当：事務局・相坂
お電話：03-3407-3726
ＦＡＸ：03-3797-5640
e-mail：info@archi-music.com

おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒106-0031
　東京都港区西麻布２-9-２　NPO 法人 純正律音楽研究会
お電話：０３－３４０７－３７２６
FAX　：０３－３７９７－５６４０
e-mail：info@pure-music.ne.jp
http://www.pure-music.ne.jp
http://www.archi-music.com/tamaki/
http://d.hatena.ne.jp/pure-music/

発行責任者：　玉木宏樹
編集　　：　秋山治樹・相坂政夫

平成 20 年 5 月 30 日